

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月17日現在

機関番号：34304

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2013

課題番号：22520339

研究課題名（和文） 両次大戦間期におけるカール・クラウスの文芸批評と時代批判

研究課題名（英文） Art Criticism and Social Criticism of Karl Kraus between the two World Wars

研究代表者

生田 真人（IKUTA MASATO）

京都産業大学・外国語学部・教授

研究者番号：70006584

研究成果の概要（和文）：カール・クラウスは「文芸劇場」で独特の演劇的パフォーマンスを展開した。彼はまた腐敗したマスメディアを批判し、特にその代表はウィーンの「新自由新聞」である。彼は「時代の精神」に対し断固として反対しており、これは好戦的なファシズム（ムソリーニの場合）に、あるいはナチズム（ヒトラーの場合）に向かっていく傾向を見せる時代への批判であった。この抵抗の精神こそ、クラウスが何故に批判的知識人たちの中で、ある種の国際的名声を勝ち得たかの証左である。

研究成果の概要（英文）：Karl Kraus developed a unique and genuine dramatic performance in his poetic theatre (*Theater der Dichtung*). He criticized also the corrupt mass media, which was especially represented by the *Neue Freie Presse* in Vienna. He was strictly against the *Zeitgeist* that was tending toward warlike fascism (Mussolini) and Nazism (Hitler). That is why Kraus could enjoy a certain international reputation in the circles of critical intellectuals.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：カール・クラウス、戦争批判、マスメディア、文芸劇場、ナチズム批判

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 第一次世界大戦と第二次世界大戦の

間の時期は「両次大戦間期」あるいは、「ワイマール文化(期)」と呼ばれるが、ベルリンを中心とする文化と時代批判

の事情は分かってきたが、ウィーン文化のほうはまだ分からないことが多く、研究意欲をそそられた。

- (2) ワイマール文化とウィーン文化を比較対照する研究方法は出始めていたので、この研究方法を踏襲し、さらに研究そのものの中身を深化させることとした。
- (3) カール・クラウスの戦争批判はまだ十全には解明されておらず、この研究を始める契機を得て、さらに私のクラウス研究を発展させるため、彼の第一次世界大戦に対する批判を検討し、さらにヒトラーに代表されるナチズム、およびムッソリーニに代表されるファシズムに対する対決姿勢を詳しく調べることにした。

## 2. 研究の目的

- (1) カール・クラウスを中心としての戦争批判の究明。特に、第一次世界大戦をクラウスがどのように総括し、さらに第二次世界大戦の前哨としてのナチズムとヒトラーに対してクラウスはどのように批判したかを究明する。そして戦争そのものの総体をいかにクラウスは徹底的に批判し永久平和の道を模索したかを実証的に考察し、その成果をまとめる。
- (2) ワイマール文化とウィーン文化でのマスメディアの果たした役割を肯定面と否定面の両面で解明する。特にクラウスが批判対象とした当時のウィーンの大新聞である『新自由新聞』を例示として、クラウスがジャーナリズムやマスメディアのどのような否定面を明らかにしたかを考察する。さらにウィーンを中心としてのクラウスの批判活動が、あるべきジャーナリズムやマスメディアの理想をどのように求めていったかということも、彼の『炬火』発刊を通じてのジャーナリズム活動を考え合わせながら、考えていきたい。
- (3) カール・クラウスが創始した「文芸劇場」が文学的、演劇的にどのように価値づけられるべきかを、その独自性とともに関研究では明らかにする。
- (4) 偏狭固陋の作家と批判されてきたクラウスが果たしてきた「文化の架橋」としての「批判的啓蒙主義者」の役割、および意義を見出すこと。

## 3. 研究の方法

- (1) クラウスを巡っての「ワイマール文化」と「ウィーン文化」の総体を3年の研究の初期に集中的に研究した。研究の後半期では、まず最初にウィーン（オーストリア）へ出張し（平成23年度）、現地でまだ入手できていなかった研究資料をできる限り収集することに努めた。そしてウィーンとの対比で、クラウスが頻りに講演旅行を繰

り返したベルリン（ドイツ）へも出張し（平成24年度）、同じく現地でクラウスのベルリン滞在期にかかわる研究資料をできる限り収集することに努めた。その結果、研究方法としてベルリンとウィーンの「二都市比較論」からカール・クラウスの批評活動と演劇創造の独自性を考察できる方法が生まれた。さらにこの比較論は都市にとどまらず、ドイツとオーストリアの「国家比較論」に発展し、実際にクラウスは「こちら側では、あちら側では」など独創的なドイツ・オーストリア比較論を展開しており、当研究でもクラウスの方法にならって、「二国家比較論」でクラウスの政治批判と文化・文芸評論を考察することとした。

- (2) クラウスの当時の政治・文化を批判する方法のユニークさを分析するため、当時の著名な批判的知識人でジャーナリストであったトゥホルスキーなどと比較する方法で、クラウスの独自性を考察した。
- (3) 研究の最終年に入手した関係文書、および映画・マイクロフィルム・CDとDVDによるメディア音声・映像資料を基本にクラウスの演劇文学の魅力と批判精神の卓抜さを考察した。特にウィーンとベルリンへの研究出張によって、資料収集の面で大いに研究は進捗した。

## 4. 研究成果

- (1) 都市比較文化論によるクラウスのヨーロッパ文化への貢献について：クラウスの講演旅行を詳しく調査した結果、クラウスのヨーロッパ越境文化への貢献という新しい彼の功績を検討できた。クラウスはヨーロッパの政治と文化の領域で、各地域、各文化圏を互いに交流させる「文化的架橋」の役割を果たそうとした試みも詳細に論じることができた。

クラウスの「文芸劇場」での演劇パフォーマンスは具体的には「講演旅行」や「演劇作品朗読旅行」の体裁をとり、地元ウィーンでの講演や演劇パフォーマンスはもとより、ウィーンを出発してインスブルック、ベルリン、プラハ、ミュンヘン、ブリュン、ブダペスト、パリ、チューリヒ、ローマなど、ヨーロッパ文化都市への広域の巡業の形で敢行された。彼の講演旅行を丹念に調査した結果、具体的に彼の空間的影響範囲の広さが理解できた。さらにクラウスの文芸と政治への批判活動の総体を理解するためには彼の二面性、つまり国際的でグローバルな視点とウィーンという彼の郷土に立脚する土着的視点の両観点から考察する方法が最も有効であると、当研究で認識できた。

クラウスの政治批判と文芸評論では、批判の射程が広くヨーロッパ全域にわたっ

ていることを、当研究では実証できた。たとえば『二都市について』など一連の評論活動でクラウスはベルリンとウィーンを比較し、ドイツとオーストリアという国家の特質と国民性の違いを、たぐいまれな批判精神とユーモアを込めて、比較文化論の形で論じている。彼の考察の対象は往々にしてヨーロッパ全域にわたっており、さらに彼自身の自身への批判的内省も多面的にとらえ、その内容を検討することができた。

(2) クラウスの戦争批判について：クラウスの批判精神は特にマスメディアと戦争批判に向けられており、その徹底した「平和主義者」の側面を当研究では解明できた。特に彼の戦争批判では、第一次世界大戦の勃発から戦後に至るまで、その同時代人として、つぶさに戦争の悲惨さを知ることとなったクラウスは『人類最後の日々』という未曾有の長大演劇作品を創造し、この作品であらゆる社会的階層、性別、政治的見解の相違を問わず皇帝や王侯貴族、さらには貧民、難民、政治的亡命者や売春婦等々、人間のあらゆるタイプを登場させ、好戦的で戦争賛美に傾いていく時代の諸相を的確に描き、何らかの形で加担していく人間の戦争責任を鋭く追及した。クラウスのこの視点での戦争批判はすでによく知られており、これまでもさまざまなクラウス研究家が緻密な研究を著作や論文の形で発表してきた。

クラウスにならって文学作品を創造することで戦争を弾劾する他の作家たちの後継文学の系譜を、私の当該研究では詳しくたどることができた。その中でも、特に以下の文学作品を詳しく検討した：Dosio Koffler; Die deutsche Walpurgisnacht. Mit einem Nachwort von Karl Riha (persona) 1987; Elfriede Jelinek: Bambiland (Rowohlt) 2004.

以上のように、戦争文学の系譜をたどる視点によって、当研究はクラウスがドイツ語文化圏の戦争批判の文学に対して現代にいたるまで多大の影響を及ぼし続けていることを実証できた。この意味で、当研究はクラウスの戦争批判のテーマについては、これからの研究に際しても、新しい研究手法の地平を開くことができたと自負している。

(3) ヒトラーとナチズムに対するクラウスの批判：これまでヒトラー批判とナチズム批判に関しては、クラウスが晩年の著作である『第3のワルプルギスの夜』を生前に発表せず死後の発表とするよう配慮したことから、クラウスの変節（ヒトラーとナチズムに関しては批判を緩めたり、ナチ

ズムに対する恐怖をクラウスが抱いていたと解釈するクラウスへの批判内容を含む）が、多数のクラウス研究家によって指摘されてきた。しかし私の研究では、クラウスのその他の作品と言説を緻密にたどることにより、クラウスがナチズムとヒトラー批判に関しても、鋭い批判精神を保持し続けていたことを実証した。『第3のワルプルギスの夜』を死後の発表とするよう配慮したことも友人、知人へ危害が及ぶことへの配慮であり、これはすでに若干のクラウス研究家によって正しく指摘されてきた。この問題を追及する方法として、私の方法は全く別の視点でクラウス自身の具体的な言説に注目することで、クラウスの批判精神の本質に迫ることとした。当該研究でまず注目したのは、これまでのクラウス研究ですでに人口に膾炙したといえるほど有名になった彼自身の言説である：『私はヒトラーについて、何も思いつくことはない。』これは『第3のワルプルギスの夜』に盛り込まれた一文であるが、この言説によってクラウスはヒトラーを軽視したとか、ナチズム批判を避けようとしたとのクラウス解釈が生まれた。ところが、この言説に真っ向から対立する言葉もクラウスは残していることを、当該研究の過程で私は見出した：『結局のところヒトラーについては、やはり私は思いつくところがある。』（オッフェンバッハの原作で、クラウスが翻案したオペレッタである『トラペツントのプリンセス』中の付加歌唱曲から）そのほかクラウスの作品を丹念にたどっていき、当研究ではクラウスがヒトラーに関して、『思いつくことあり』と『思いつくことなし』の両表現を多用していることを確認した。このことから、このクラウスの言説はヒトラーを突き放したり、逆に引き寄せ多大の関心をヒトラーに寄せられているということを明示する「批判上の戦略」であると、当研究では結論づけた。したがって、従来の研究では『第3のワルプルギスの夜』の中の『私はヒトラーについて、何も思いつくことはない。』のみに注意が向けられ、そこからクラウスのヒトラー批判に関しては誤った解釈が広まっていったといえる。（ちなみに『私は（～）に関して思いつくところはない』とする文章をクラウスは色んなナチズム信奉者に当てはめて書いており、この文章はクラウスがナチズム批判に関して用いた好みの戦略用語であったことがわかる。）

(4) クラウスが創始した「文芸劇場」の独自性を新たな視点で解明でき、その成果を発表論文で紹介できた。さらにその中に盛り込まれたクラウス自身の創作になる『付加一、時事歌唱曲』は一方で辛辣な戦争批

判の内容を含み、他方で、当時の浅薄な文化・文芸の総体を諧謔の精神で批判しているところに、クラウスの独自性を見出した。

その具体例を若干あげると、まず「文芸劇場」とナチズム批判の密接な関連では、クラウスが「文芸劇場」の翻案劇に織り込んだ、クラウス独自のオリジナル作品である『時事一、付加歌唱曲』で、事実に基づき様々な「国民社会主義」のイデオロギーに基づく蛮行を諧謔と皮肉、そしてユーモアをも込めて鋭く批判していることを確認した。たとえば当時から現代にいたるまで名匠といわれる指揮者トスカニーニがイタリアの国粹的な作品を指揮することを拒否しイタリアとドイツのファシストによって背中を殴打される事件が起こった。この事件を巧みにクラウスはオフエンバッハ原作の翻案劇である『青髭』の中に取り入れており、その『付加歌唱曲』で、肉体的に殴打されても（ナチズムやファシズムに対し）這いつくばることのないトスカニーニの姿を活写して、全体主義への批判を明示した。さらにクラウスの「文芸劇場」の『時事一、付加歌唱曲』による批判は早くに始まっていることを確認できた。クラウスはすでに 1924 年頃からナチズムとファシズムの萌芽期にも批判を開始しており、たとえば『青髭』や『ペリコーレ』（ともにオフエンバッハの原作になるオペレッタ）の翻案劇では、ヨハネス・ショーバー（オーストリアの警視総監で後の首相）の、後のドイツへの「併合」を引き起こす契機となるようなドイツへの迎合政策と、国内の弾圧政策を鋭く批判している。クラウスの批判精神は的確で鋭く、すでに 1920 年代の前半で、後の第二次世界大戦へと突入していく時代の悪しき傾向を見抜いていたことを確認できたことは、当研究の重要な成果の一つである。

(4)「文芸劇場」での演目と、その政治的影響力、そして文学的・演劇的意味について：一人舞台による独特の「文芸劇場」での上演により、クラウスが主としてネストロイ、シェークスピア、オフエンバッハ三名の劇作家の再評価を促したことを今会の研究で検討し、実証できた。

さらに上記三名の演劇作家の受容により、クラウスは自身の演劇理念を練り上げ、理想とする演劇をどのように模索していったかについても、当研究では検討することができた。彼は『人類最後の日々』があまりに長大過ぎると自覚し、その改変を他の劇作家たちの影響もあって、促された。その際、彼は『長い観劇の夕べになるとしても、一日で上演されることができるであろうほどに、原作を短縮する試み』と説明し、さらに、『私はアンサンブル劇場（演

劇）を立ち上げたかったのです』と、上演形態について要望を述べている。このような言説に注目して、当研究ではクラウスの意外に現実主義的な演劇理念を確認することができた。

ネストロイの受容と再評価では、クラウスは『ネストロイとブルク劇場』という演劇論まで発表している。そこでは『世界、または現世の没落』というイメージを強調し、一方で「世界の没落」、「ヨーロッパの没落」という観念を呼び起こし、他方で演劇を一つの範例として「文化の低迷」、「文化の退廃」を置き、両者の分ちがたい結びつきを強調している。当研究ではこのクラウスの考え方を、ヨーロッパの悪しき時代への批判ととらえ、この現実を赤裸々に誇張で描いたネストロイの演劇が持つ革新性を引き出した演劇論でもあると解釈し、新たなクラウス像を打ち立てることができるよう努めた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

1. 生田 真人：「越境文化の形成とその限界」京都産業大学人文科学系列、46号(2013年3月)335-354. 査読あり。
2. 生田 真人：「ドイツ啓蒙主義のドイツ演劇への影響について(1)」京都産業大学人文科学系列、45号(2012)371-387. 査読あり。
3. IKUTA, MASATO: *Der permanente Weltuntergang. Karl Kraus' Auseinandersetzung mit dem Krieg aus heutiger Sicht. In: Neue Beiträge zur Germanistik, Band 10, Heft 1, hrsg. v. Der Japanischen Germanistik (2011), 43-61. 査読あり.*  
(<http://dnb.d-nb.de>)
4. 生田 真人：「記憶による過去の清算と克服」京都産業大学人文科学系列、39号(2010)171-186. 査読あり。

[学会発表] (計1件)

1. IKUTA, MASATO: *Erzählte Geschichtsschreibung als in-*

terkulturelles Me-  
dium und wider-  
standskrafttra-  
gende Waffe des In-  
dividuums — Erin-  
nerung und Gedäch-  
tnis bei Milo Dor  
IVG-Kongress, War-  
schau (Polen) 6.

August 2010.

[その他]

ホームページ等

<http://www.jgg.jp/modules/inquiry.php>

<http://dnb.d-nb.de>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

生田 真人 (IKUTA MASATO)

京都産業大学・外国語学部・教授

研究者番号：70006584